2011. 7.28.

日刊 建設工業新聞

所論諸論

加速する台湾の現代建築

南 泰裕
建築家、国士舘大学准教授

空港に降り立つと、すぐに亜熱帯の生暖かい空気を感じ、似ているとはいえ、日本とは異なる、近くて遠い別世界なのだな、と思った。

この4月初めに訪れた、台湾である。今回は亞洲大学で建築を教えられている謝宗哲さんにご招待いただき、記念講演の依頼を受けての訪問だった。台北の松山空港から、高速鉄道で台南に向かうと、暖かい熱気は一段と強くなる。ここで謝さんとお会いし、古都・台南の伝統的なマーケットや古い街並みを案内していただいた。

翌日、台湾の建築系専門出版社である「田園城市」の社長を、謝さんにご紹介いただく。「田園城市」社は、伊東豊雄さんや五十嵐太郎さんの本など、日本の建築関連図書や翻訳本を多数出版していて、日本の現代建築への目配りの良さを感じさせた。

その後、台南地元の建設会社である「府都」本社を訪問。ここで、謝さんが企画した、台湾における12組の若手建築家による「台湾集合住宅的未来予想図」展を鑑賞する。本社ロビーのエントランスホールを贅沢に使って開催された、この展覧会への注目度は高いようで、世代に限らず、多くの鑑賞客が訪れていて賑やかだった。出展者は主として30代半ばの建築家たちで、西洋や日本などへの留学やインターン経験を持つ人も多く、新しい建築シーンに積極的に参画していこうとする意欲が感じられて、頼もしかった。

この展覧会に合わせて企画された記念講演で私は、一緒に招待された五十嵐太郎さんとともに、日本の現代建築や自作を紹介した。会場には300人以上の方が聴きに来られ、立ち見もいて、みなさんがとても真剣に話を聞いて下さっていたので、当の私たち自身が、その熱気に驚いてしまった。

次の日には、台中方面へと足を向け、日本の團紀彦さんが設計された日月潭のビジターセンターを訪れた後、台中オペラ・ハウスの現場を見学。これは知られる通り、伊東豊雄さん設計による革新的な現代建築で、現場を案内して下さった伊東事務所の佐野さんによると、当初、あまりに前衛的でチャレンジングな建築であったため、工事をやってもらう施工会社がなかなか見つからなかったとのこと。が、現場も次第に進み始め、現地には複雑なコンクリート曲面のモックアップもできていて、世界を先駆ける建築をこの地に創り出そうとする熱意が、十分に伝わってきた。團さんと伊東さんの建築とも、複雑な3次元曲面からなる大規模建築で、こうした建築を実現させる技術が、台湾にも蓄積され始めていることを知り、世界の建設技術の差異が、次第になくなっていくだろうことを予感させもした。

そのことは、建設技術だけに限らない。この翌日、台北に戻り、建築のエンジニアリングをサポートする「利道」という技術事務所や、中国・台湾・日本をまたにかけてインターナショナルに活動する建築家集団などを取材し、建築デザインやエンジニアリングのレベル、コミュニケーション能力の高さ、国際的な建築的動向の受容速度といった点からも、台湾の現代建築をめぐる状況が、日々加速していることを痛感したのである。

謝さんによれば、台湾の人にとって、日本はもっとも行ってみたい海外の国のひとつであるという。その延長で、台湾における建築関係者の、日本の建築家や現代建築に対する関心度は、きわめて高い。

そのことは、伊東豊雄さんが台中や高雄に大規模建築を実現させていることからも、読み取れる。そうしたことから、ある意味で台湾と日本の、今の建築的交流は、近くて遠い国同士の、蜜月の時代であることをも感じさせる。

台湾と日本との、こうした交流が進む中で、今後、どのような新しい建築的成果が生み出されていくのかを、自身との関わりも含め、楽しみに期待し続けていきたい。